熊取町立熊取図書館

図書館活動の点検・評価（平成 23 年度）

１．点検・評価への取組み　・・・１

２．自己点検・評価　・・・３

３．外部評価（平成 23 年度図書館活動の点検・評価への意見）・・・９

1. 点検・評価への取組み

熊取図書館では、図書館が地域や住民に貢献できることを目指し、今後 10 年間の熊取図書館が目指す姿についてまとめた「熊取町図書館計画」を平成 19 年 1 月に策定した。

基本方針	
	１．図書館は「まちづくり」の情報拠点になります **２．図書館は「住民との協働」によるサービスをめざします** **３．図書館は「住民の生活を応援」します**

平成 19 年度には第 1 次実施計画（H19－H21）を、また平成 21 年度には職員一人ひとりが「これから3年間のサービス」を提案し、全員で話し合いを繰り返しながら長期短期の目標を分け、図書館協議会にもご意見をいただきながら、第2次実施計画（H22－H24）を作成した。

これら計画に基づき、限られた資源（予算・人員）を有効に活用し、より良い図書館サービスを実現していくためには、熊取図書館が「何を目的として（使命）」「どの程度を目指し（目標）」「どれぐらい実現できたのか（結果）」を明らかにしていくことが大切である。平成 20 年に図書館法が改正されたこともふまえ、図書館がどのようなサービスを行っているのか、できるだけ分かりやすく伝えることができるように、図書館活動の点検・評価を行うこととし、平成 22 年度以降は毎年、「図書館活動の点検・評価」をまとめている。

> **第７条の３　図書館は、当該図書館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき図書館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない。（図書館法）**

本評価（平成 23 年度）については、前年度初めて行った4段階評価を元に図書館が1年間でどのような改善を行ったかわかるよう、前年度評価もあわせて表記し、評価の推移が分かるようにした。

【評価の目的】

より良いサービスの実現

（サービスの改善や向上に結びつく評価（評価のための評価にならないように））

効率的・効果的な運営

（限られた資源（予算・人員）の有効活用、優先順位）

住民との協働による運営

（住民に関心を持ってもらえるような方法、結果だけではなく過程の公開）

【評価の方法】

自己点検：毎年の実施計画に基づき、サービスの状況を自己評価

外部評価：客観的な視点を確保するため、図書館協議会から評価・講評を得る

アンケート等：満足度を調査する方法として、アンケート等を実施する

（平成 22 年度に来館者アンケートを実施　＊3年に1回程度を予定）

公　　表：「図書館活動報告」として統計や行事記録等と併せ印刷発行及びホームページ公開

【評価項目】

図書館で行う事業を実施計画（H22－H24）に基づき下記の5項目に分類し、評価する。

1　住民参画による適切な図書館運営
2　情報収集の場としての図書館機能の充実
3　だれもが読書に親しめる環境づくりの推進
4　子どもの読書活動の推進
5　多様な学習機会の創出

【目標値】

目標値は実施計画（H22－H24）の終了年次である平成 24 年度としているため、昨年度からの変更はない。

（実施計画において、適切な蔵書の更新と図書館利用の広がりを大きな目標としていることから、開架している図書の新鮮度は、目標値を 8.04％（人口規模別・貸出密度上位 10％の図書館の平均値＊平成 21 年）とし、年間有効利用率は長期的な目標として 30％に設定している。それ以外の目標値は、対前年度（H20）10％増を一定の目安として、これまでの実績等を勘案し平成 24 年度の目標値としている。「図書館活動への関心の高まり」など数値化しにくいもの、予約冊数など目標の設定自体がそぐわないものについては数値目標を設定していない。）

【評価の基準】

実施計画の目標値により、ABCDの4段階で評価を行う。

A：計画どおり実施し、目標値を達成した。
B：概ね計画通り（8割以上）実施したが、不十分な点や課題が残った。
C：不十分な点や課題が多く（8割未満）、計画通り実施できなかった。
D：取り組んでいない。

※目標値設定と評価基準については、より明確に行うため次期変更を予定

【アンケート】

利用者の満足度を知る方法の一つとして、平成 22 年6月に6年ぶりとなる来館者アンケートを実施した。（アンケート結果は、「図書館活動の点検・評価（平成 21 年度）」に掲載）

アンケートは 3 年ごとに実施する予定で、次回は平成 25 年に実施する。

※23 年度評価の変更点

図書館協議会の意見をふまえ、下記の項目、指標を追加した。

評価表2：（2）の2の指標として、書庫見学会開催数を追加、（3）の4の指標に依頼件数追加
評価表3：（3）の3の施設へのサービスを追加
評価表4：（4）の2資料の収集を追加

2. 自己点検・評価

評価表1　住民参画による適切な図書館運営

○目標と評価

(1)住民との協働によるサービスの推進　【平成 23 年度自己評価:B （前年度B)】

(2)効率的・効果的な図書館運営　【平成 23 年度自己評価:A （前年度A)】

○自己点検結果

平成 23年度に実施した住民との協働による事業は別紙(P4)のとおりである。図書館で開催する行事等の共催・協力、町民文化祭への参加を行った。子どもの読書環境を支える住民グループ、保育所(園)や学校との連携については、合同研修会を開催し、課題の共有や学習機会の提供を行うことができた(詳細は事業報告P8)。また、図書館資料収集への住民参画を進める「雑誌オーナー制度」を平成 23 年度から開始し、8 誌の提供を受けることができた。住民との協働は様々な形で進めてきており成果も見えてきているが、目標とする「よりよい町づくりへの貢献」のために更なる協働を目指し、今回もB評価としている。平成 24 年度は図書館協議会委員の公募を開始するなど、より一層の住民参画による図書館運営を進めたい。

効率的・効果的な図書館運営については、平成 23年度は図書館の自己評価に4段階評価の指標を取り入れるとともに、前年度に引き続き図書館協議会において外部評価を実施し、公表した。視聴覚資料費については、町の行財政改革プランに基づき計画通り削減しており、貸出数も減少している。雑誌については引き続き購入は 150 タイトルだが、「雑誌オーナー制度」の導入によりタイトル数が増え、貸出数も増加した。職員の資質向上については、平成 24 年度は館内研修を増やし、ブックトークやビブリオバトルに取り組んだ。今後も館内外での研修を充実させていきたい。

評価対象事業		計　画	評価の指標	平成23年度取組実績	目標値（24年度）	平成22年度取組実績	【参考】20年度
(1)住民との協働によるサービスの推進							
1	住民との協働による事業の実施	協働によるきめ細かなサービスの提供	・実施回数	別紙	よりよい町づくりへの貢献	別紙	－
2	子どもの読書活動を支える体制づくりの推進	連絡協議会、専門部会、連絡会等の開催	・会議実施回数 ・参加人数	10回 215人	子どもの身近な読書環境の充実	11回 194人	7回 118人
3	図書館協議会の開催	図書館サービス向上のための協議、評価を行う	・開催回数 ・検討項目	3回 検討項目＊	運営に関する課題の審議、会議内容の分かりやすい公表	3回	3回
(2)効率的・効果的な図書館運営							
1	図書館活動の点検・評価	より良いサービスの実現を目指す	－	公表した	図書館活動への関心の高まり	公表した	未実施
2	資料費の抑制	町の行政改革プランに基づき抑制する	・雑誌ﾀｲﾄﾙ数 ・AV資料購入費	・150ﾀｲﾄﾙ ・286千円	・150ﾀｲﾄﾙ ・286千円	・150ﾀｲﾄﾙ ・286千円	・196ﾀｲﾄﾙ ・588千円
3	人件費の縮減	正職員を減員し嘱託員を採用（平成21～26年度）	・職員数・嘱託員数 ・臨時職員数	・7人・3人 ・6人	・7人・3人 ・6人	・8人・2人 ・5.8人	・9人・1人 ・5.8人

＊協議会検討項目：図書館活動の点検・評価について、図書館の資料提供への取り組みについて

資料（評価表1）

平成23年度　熊取図書館における住民との協力、連携、協働事業一覧

1．催し、講座等

		活動(事業)名	実施日／回数	事業内容	団体名	
	1	地域出前講座（タピオ体操との）	3回	地域の公民館等で実施している、健康づくりのための事業。図書館は、紙芝居等の読み語りや図書館の案内を行っている。	くまとりタピオ元気体操ひろめ隊	★
○	2	グロトリアンコンサート	6/26（日）	「グロトリアン・シュタインビッヒ」による恒例のコンサート［ピアノ：中野喜美子氏　ヴァイオリン：安田華香氏］	コンサートボランティアスタッフ	
○	3	シニアコンサート	3/30（金）	一般に募集するとともに、高齢者サービスの一つとして、毎年町内の全ての福祉関連施設に案内を送付し、図書館から参加を呼びかけている。［出演：かたつむり］		
	4	講演会	8/28、9/11、10/23	毎年多様なテーマで、くまとり読書友の会との共催による文学講演会を開催している。［平成23年度講師］　小堀貴亮氏（8/28、9/11「温泉通になろう」）　面屋庄甫氏（10/23「京人形の世界」）	くまとり読書友の会	
	5	講演会	5/29、11/10、1/19	【平成23年度子どもゆめ基金助成事業】図書館は、テーマに応じた本の展示やＰＲを支援。［平成23年度講師］　佐々木宏子氏（5/29「絵本を読む家族」）、小澤佐季子氏（11/10「絵本と子どもの出会う場所で」）、ブックトークと本棚の会（1/19「子どもと楽しむブックトーク」）	熊取文庫連絡協議会	★
	6	かがくあそび「空気で遊ぼう」	7/24（日）	平成23年度子どもゆめ基金助成事業［講師：高松泰子氏］図書館は、テーマに応じた本の展示やＰＲを支援。		
○	7	絵本ライブ	9/23（金）	長谷川義史氏のワークショップにて開催協力	熊取文庫連絡協議会	
○	8	手づくり会	9/10（土）	紙やストローを使ったおもちゃ作り	シルバーアドバイザー泉州南	
	9	町民文化祭	11/5・6	町民文化祭で、図書館でも各種事業を開催。絵本の読み語り、おはなし会、手づくり会、おりがみ遊び、展示協力など	熊取町文化振興連絡協議会／熊取文庫連絡協議会／くまとり読書友の会	
○	10	講座	9/28（水）	布を使ったおもちゃづくり講座「布のおもちゃをハンドメイド」　講師：いちごの会	いちごの会	
	11	文学講座	通年	和歌、短歌、俳句、朗読、読書会など多様なテーマで講座を開催し、読書活動の振興や図書館利用の促進を行っている。図書館は本の貸出しやＰＲを支援している。	くまとり読書友の会	★
	12	子どもの本の会	通年	絵本や児童文学、ストーリーテリングを学ぶ大人対象の講座を開催している。図書館は、本の貸出しや資料相談に応じている。	熊取文庫連絡協議会	★
○	13	熊取周辺にいる野鳥たち	6月	熊取周辺で撮影された野鳥の写真展	カワセミ写真クラブ	

2．子どもの読書環境の整備

	14	熊取町子ども読書活動推進連絡協議会・専門部会	合計10回開催	子どもと本に関わる住民団体、保育所(園)、幼稚園、小・中学校、関係課、図書館のネットワークづくりを進め、情報交換や学習機会の提供を行う。「第２次子ども読書活動推進計画」に基づき、各種部会や研修会を行った。※詳細は活動報告Ｐ	文庫連／くまとり子育ちWA･輪･和／たんぽぽの会／くまとりロンド／熊取こどもとおとなのネットワーク／熊取町こども会育成連絡協議会	
	15	ブックスタート	年12回	図書館、健康課、文庫連が連携し平成14年度から実施。４か月児健診において保護者への個別案内を行い絵本を手渡す。	熊取文庫連絡協議会	
○	16	あかちゃんの時間	年12回	親子のコミュニケーションを深めることができるように、絵本やわらべうた等を楽しむ。毎回、文庫連担当者と図書館がプログラムの内容を検討する時間を設け、内容を工夫している。	熊取文庫連絡協議会	
	17	おはなしキャラバン	通年	文庫連が保・小・中の子どもたちにおはなしを届けている。図書館は本の貸出しや小・中学校で使用した図書の返却運搬を支援。	熊取文庫連絡協議会	★
	18	家庭・地域文庫	通年	自宅や地域の憩いの家等町内５か所で、本の貸出や読み聞かせ等子どもが本に親しむ取組みを行っている。図書館は本の貸出等を支援している。		

※○は図書館主催、★は住民団体主催

3．図書館資料の作成、施設整備

19	さわる絵本の作成	通年	視覚に障がいのある子どもが、手で触れて内容を理解できるように工夫した絵本を作成している。図書館が絵本を選んで作成を依頼したり、著作権の手続きを支援している。	さわる絵本
20	点字図書の作成	通年	町広報紙やさまざまな本の点字図書を制作し、図書館に寄贈している。図書館が本を選んで作成を依頼したり、利用者に点字の読み方も教えてもらっている。	点訳サークルととろ、点訳サークルブレイル
21	布絵本の製作	年12回	乳幼児から障がいのある子どもまで、幅広く楽しむことができる布絵本を製作している。（図書館・保育所等、町内の施設に1点ずつ寄贈した）	いちごの会
22	図書の修理	年12回	図書館で、読み疲れ等によりページが外れたり破れたりした本の修理を行う。	しゅうり工房（くまとり読書友の会）
23	健康コーナー掲示	随時	図書館に設置した「健康コーナー」において、住民に役立つ健康情報や活動内容を掲示している。	健康くまとり探検隊／熊取町食生活改善推進協議会／くまとりタピオ元気体操ひろめ隊
24	リサイクルブックフェアーの開催	5/27・28 11/5・6	図書館で不要になった本のリサイクルフェアーを年２回開催。収益は学校図書館の図書費として寄附している。	リサイクルブック実行委員会
25	緑のカーテン設置		児童室窓側に緑のカーテンを設置。	グリーンパーク熊取

評価表2　情報収集の場としての図書館機能の充実

○目標

(1) 利用者の拡大～図書館の役割を伝える・拡げる取組み　【平成 23 年度自己評価:C （前年度C)】

(2) 新鮮で魅力的な蔵書　【平成 23 年度自己評価:A （前年度B)】

(3) 的確な資料・情報の提供　【平成 23 年度自己評価:B （前年度B)】

○自己点検結果

平成 23 年度も前年度に引き続き利用の拡大に向けた取組みを行ったが、町内住民の貸出人数は微増したものの、住民の年間有効利用率（図書館で年間に1回以上資料を借りた人の割合）は微減となった。図書館で本を借りるのではなく、雑誌や新聞に目を通し時間を過ごすという滞在型の利用は引き続き多くなっており、指標の取り方も課題の一つである。

蔵書については、開架蔵書新鮮度の目標を定め、計画的な購入をしてきた結果、目標値とほぼ同水準といえる数値に到達した。住民の多様な要求に応え、公立図書館としての役割を果たしていくため、適正な蔵書構成を維持していきたい。また平成 24 年度からは書庫見学会の回数を増やすなど、より一層、資料の有効活用を図っていきたい。

的確な資料・情報の提供については、4 月に新たに「司書のおすすめ本コーナー」を設置し、非常によく利用されている。また、平成 22 年度にインターネットからの予約サービス機能の強化を行って以降、インターネットでの予約が急増している。庁内への行政情報の提供については、「仕事に役立つ新刊案内」の毎月発行と、新聞記事情報「今日の話題」の週4日発行を引き続き行い、多くの依頼があった。住民が日常生活で必要とする情報の提供を行う課題解決支援については、その一つとして設置した健康コーナーの闘病記について、コーナー設置前と比較したところ回転率が向上した。病名別に分類したことにより、必要な情報を得やすくなったものと考えられる。

評価対象事業		計　画	評価の指標	平成23年度取組実績	目標値（24年度）	平成22年度取組実績	【参考】20年度
(1)利用者の拡大							
1	利用者の拡大	より多くの住民に利用してもらえる図書館を目指	・年間有効利用率	20.3%	30%	20.5%	21.3%
2	職員の対応	対応についての満足度向上	・来館者アンケート	＊	80%	77.6%	―
(2)新鮮で魅力的な蔵書							
1	資料の収集	新鮮な蔵書構成の維持	・開架蔵書新鮮度	8.03	8.04	7.86	6.02
2	蔵書の有効活用	書庫資料を含め、より多くの資料を利用してもらう	・テーマ展示回数 ・書庫出し冊数 ・書庫見学会開催数	143回 21,636点 1回	維持 12回	178回 20,240点 2回	114回 24,753点 新規指標
(3)的確な資料・情報の提供							
1	資料の貸出	個人貸出点数の増加	・住民1人あたり個人貸出点数	7.6冊	8.5冊	7.6冊	7.65冊
2	予約サービス	インターネット予約の拡充	・ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ予約件数 ・ﾊﾟｽﾜｰﾄﾞ発行件数	15,498件 635件	―	12,779件 764件	7,827件 297件
3	他図書館との連携	相互貸借の円滑な実施	・借受冊数 ・他館への貸出冊数	1,721冊 207冊	―	1,743冊 234冊	2,060冊 54冊
4	行政情報提供	住民へのわかりやすい情報提供 庁内への情報提供	・利用度（来館者ｱﾝｹｰﾄ） ・情報提供回数 ・依頼件数	＊ 217回 683件	48% 120回 新規指標	22.8% 210回 ―	未調査 12回 ―
5	課題解決の支援	健康情報の提供	・利用度（来館者ｱﾝｹｰﾄ） ・蔵書冊数	＊ 4,017冊	65% 維持	34.3% 3,722冊	未調査 3,163冊

＊来館者アンケートは3年に1回実施（H22実施）

評価表3 だれもが読書に親しめる環境づくりの推進

○目標

(1) YA(ヤングアダルト)サービスの充実　【平成 23 年度自己評価:B（前年度B)】

(2) シニアサービスの充実　【平成 23 年度自己評価:A（前年度A)】

(3) 障がいのある方へのサービスの充実　【平成 23 年度自己評価:B（前年度B)】

○自己点検結果

YA世代(中高校生)へのサービスについては、特集展示や新刊案内の発行を引き続き行ったが、有効利用率は前年度に比べ減少となった。中学校図書館を通じての利用にきめ細かく対応するとともに、図書館への来館を促す取り組みを検討していきたい。

シニア世代へのサービスについては、大活字本の購入冊数を増やし、利用も増えた。また紙芝居などを楽しんでもらう出前講座「らいぶらり庵」への依頼が引き続きあり、前年度まで出前を行っていなかった地区からも要請があるなど、多くの地区からの要望にこたえた。図書館サービスをPRする機会として、今後も引き続き実施していきたい。出前講座の際にシニア層への聞き取り調査を行い、図書館を利用しない理由としては、「来館困難」が多く挙がった。平成 24 年度には町内循環バスの運行ルート及び時刻表の変更が予定されており、利便性向上が期待される。

障がいのある方へのサービスについては、対面朗読については利用者が増えた。朗読は講習を受けたボランティアにお願いしているが、ご希望に添う本探しなどその都度職員が対応している。宅配サービスの申し込みはなかった。また、点字図書やさわる絵本の貸出を行うとともに、民生委員研修会や区長会を通じて様々なサービスのPRに努めた。

評価対象事業		計　画	評価の指標	平成23年度取組実績	目標値（24年度）	平成22年度取組実績	【参考】20年度
(1) ＹＡ(ヤングアダルト) サービスの充実							
1	魅力的な図書の収集	学校図書館との連携、アンケート等により読書傾向把握	・YA世代年間有効利用率	21.2%	23%	22.1%	22.1%
2	読書案内	新着図書などの紹介を工夫し利用につなげる。	・新刊案内発行回数 ・本の紹介POP冊数	6回 7冊	6回 60冊	6回 21冊	未実施
(2) シニアサービスの充実							
1	計画的な資料収集	大活字本、録音図書等の貸出	・大活字本所蔵冊数 ・録音図書所蔵冊数	1,332冊 687点*	1,200冊 500点	1,279冊 348点	961冊 447点
2	地域出前講座	住民との協働による講座開催	・開催回数 ・参加者数	8回 385人	図書館活動への関心の高まり	13回 432人	未実施
3	施設へのサービス	団体貸出、コンサート招待	・貸出団体数、冊数 ・行事参加者数	3施設、203冊 19人	―	指標変更	指標変更
(3) 障がいのある方へのサービスの充実							
1	宅配サービス	広くＰＲし、利用者の拡大に繋げる。	・貸出冊数	0冊	―	16冊	2冊
2	対面朗読	広くＰＲし、利用者の拡大に繋げる。	・実施回数	32回	―	33回	59回
3	施設へのサービス	団体貸出・リサイクル図書提供施設数、冊数	・貸出団体数、冊数 ・提供団体数、冊数	5施設、142冊 3施設、52冊	新規指標	新規指標	新規指標

＊録音図書所蔵数は、前年度までは集計方法の違いにより統計に反映されていない資料があったため、24年度は集計方法を変更した。

評価表4 子どもの読書活動の推進

○目標

(1) 子どもと本をつなぐ大人の育成・支援　【平成 23 年度自己評価:B (前年度B)】

(2) 乳幼児期・幼児期における本に親しむ機会の拡大　【平成 23 年度自己評価:A (前年度A)】

(3) 学校図書館支援センターとしての機能の充実　【平成 23 年度自己評価:B (前年度B)】

(4) 障がいのある子どもの読書環境の整備　【平成 23 年度自己評価:B (前年度C)】

○自己点検結果

子どもと本をつなぐ大人の育成・支援については、「子どもとの遊び方講座」を 4 回実施した。昨年度に比べ、参加者は増え、直接的な新規活動者の増加にはつながらなかったものの、幅広い参加者に働きかける機会となった。乳幼児期・幼児期における本に親しむ機会の拡大については、保育所(園)・幼稚園への定期的な本の配達として「絵本こぐま便」を本格的に開始した。身近な場所で本と楽しく出合うための取組み「えほんのひろば」も 3 月に開始し、平成 23 年度の有効利用率は目標値に達した。

学校図書館の支援については、計画に基づき、小学校 2 校に出向き、学校と連携し除籍作業やレイアウトの見直しなどを支援した(8 校中 4 校完了)。平成 22 年度末に発足した布絵本を製作するボランティアグループが年間を通じて活動し、完成した布絵本は学校や保育所などへ1点ずつ計 26 点寄贈することができ、活用方法についての研修会も実施することができた。平成 24 年度からは図書館での布絵本の貸出を開始したい。また、平成 23 年度は 9 月から 10 月にかけ子どものイベントを「こどもワールド in 図書館」として集中的に実施し、多くの参加があった。

評価対象事業		計　画	評価の指標	平成23年度取組実績	目標値(24年度)	平成22年度取組実績	【参考】20年度
(1)子どもと本をつなぐ大人の育成・支援							
1	新刊や研修機会等の情報提供	関係団体、施設への情報提供	・提供先件数	20施設 7団体	20施設(全保幼小中)10団体	20施設 7団体	19施設
2	ボランティアの育成・支援	子どもと本をつなぐ役割を担うボランティアの育成	・講座参加人数	のべ67人	新規活動者の増加	34人	未実施
(2)乳幼児期・幼児期における本に親しむ機会の拡大							
1	利用の拡大	子ども(乳幼児・幼児期)の利用の増加	・年間有効利用率(乳幼児・幼児)	30.6%	30%	28.8%	29.5%
2	子育て支援講座の開催	図書館及び地域での講座開催	・館実施回数、人数 ・地域　〃	24回、526人 12回	維持 6回	34回、920人 7回	33回、889人 未実施
3	図書館訪問、団体貸出	保育所(園)幼稚園からの訪問、団体貸出の増加	・訪問施設数 ・団体貸出冊数	5施設 4,909冊	8施設 3,600冊	10施設 3,966冊	3施設 3,533冊
4	団体貸出	地域の文庫、子育て支援関係講座等への団体貸出	・団体数 ・貸出冊数	14団体 3,672冊	10団体 3,000冊	7団体 1,830冊	5団体 1,589冊
(3)学校図書館支援センターとしての機能の充実							
1	学校図書館への資料提供	連絡便を活用し迅速な資料提供を行う	・貸出冊数 ・予約件数	10,415冊 2,072件	維持	9,946冊 1,659件	10,328冊 2,659件
2	学校図書館資料の除籍支援	計画的に除籍を行えるよう支援する	・実施校数	2小学校 (累積4校)	累積6校 (8校中)	1小学校 1中学校	未実施
3	利用の拡大	子ども(学齢期)の利用の増加	・年間有効利用率(小学生)	48.8%	50%	47.4%	48.6%
(4)障がいのある子どもの読書環境の整備							
1	子どもが本と出合う機会の充実	図書館に来館する機会の充実	・実施回数	1回	5回	1回	2回
2	資料の収集	多様な資料の提供	・児童向け点字図書数 ・さわる絵本数 ・布絵本数	38冊 31冊 4冊	新規指標	新規指標	新規指標

評価表5　多様な学習機会の創出

○目標

(1) 文化講演会等の開催　【平成 23 年度自己評価:A （前年度A)】

(2) 住民団体等の活動の支援　【平成 23 年度自己評価:B （前年度B)】

○自己評価

文化講演会等の開催については、前年度は国民読書年の関連行事や委託事業があったため、比較すると実施回数は少なくなっているが、熊取町文化振興財団をはじめとする各種団体との共催でさまざまな事業を開催することができた(詳細は事業報告)。平成 24 年度は熊取町文化振興財団の事業はなくなるが、引き続き多くの団体と連携しながら、内容を工夫していきたい。

会議室やホールの活用については、稼働率はほぼ現状維持となっているが、利用団体数は増加した。さらなる利用促進のためPRしていきたい。町内で活動する団体の会報等については「くまとりコーナー」に設置しており、住民に分かりやすく提供できるように配置している。町では、平成 22 年3月に「熊取町協働憲章」を策定し“協働によるまちづくり”を進めることとしており、図書館では、住民等が活動しやすい基盤整備の一環として、町内で活動する団体の情報提供の推進や気軽な情報交換の場となるよう、今後も住民とともに取り組んでいきたい。

評価対象事業			計　画	評価の指標	平成23年度取組実績	目標値（24年度）	平成22年度取組実績	【参考】20年度
(1)文化講演会等の開催								
	1	講演会、講座等の開催（大人対象）	住民の興味・関心に応じ、利用を促進する講演会等の開催	・実施回数 ・参加者数 （共催・協力事業含む）	7回 534人	維持	10回 599人	8回 448人
(2)住民団体等の活動の支援								
	1	会議室の提供	地域活動の活性化に寄与	・利用団体数 ・稼働率	43団体 30.3%	40団体 30%	30団体 30.6%	29団体 未統計
	2	資料・情報の収集、提供	住民団体等の活動内容を把握し分かりやすく提供する	・収集団体数	49団体	60団体	47団体	未統計

外部評価（平成 23 年度図書館活動の点検・評価への意見）

熊取町図書館協議会

総合評価

熊取町立図書館では、平成 19 年 1 月策定の「熊取町図書館計画」に基づき、各年度の活動を職員一人ひとりが検証し、今後のサービスを提案している。平成 21 年度より各年に自己点検・評価されたものを図書館協議会が外部評価を行っている。今年度は 3 年目にあたる。

＜住民の生活を支えるサービスの拡充＞

各年齢層に目配りの利いた企画が年間計画の中で常に取り組まれている。（図書館活動報告－事業報告編－参照）図書館の利用に遠い年齢層や地域の子育てを応援するために、積極的に館外での事業に取り組んでいる。住民の関心の高い健康や生活のニーズを捉えた小さなコーナーを活用しての資料紹介は、司書の選書力が活かされている。さらに平成 24 年度からはビブリオバトルなど利用者参加の事業にも積極的に取り組んでいる。

＜住民との協働＞

図書館が行っている協働の形は、住民参加の図書館づくりから始まったもので、住民の持つ柔軟性と行政としての平等性や公平性、特に「図書館の自由に関する宣言」を柱として、積極的な議論の中で育まれてきたものである。有効な相互関係の中で進められてきた歴史があり、町の協働憲章を推進するモデルとなるものと思われる。

＜障がいのある方への図書館利用への取り組み＞

障がいのある方への図書館利用に関しては、これまでにも福祉施設との関わりや図書館行事への案内や情報提供などはしてきたが、まだまだニーズの掘り起こしや、サービス内容の検討、職員研修が必要と思われる。支援学校（佐野・岸和田など）などでの図書の活用の仕方などを調査することで、学べる点や協働できる点が見つかるのではないかと思う。図書館独自の取り組みでは広がっていかない困難さも抱えており、福祉や人権分野、障がいのある方へのボランティアとの交流も必要となってくる。熊取では保育所や学校も積極的に地域での教育を進めており、連携を取りながら、障がいのある子どもを持つ親の会や子どもたちへの働きかけも積極的に行う必要がある。

＜町行政と各部局への情報提供と連携＞

庁内への行政情報の提供は、新聞記事情報「今日の話題」を週 4 日発信し、「仕事に役立つ新刊案内」を毎月発行するなど、行政サービスの展開に役立っている。それは間接的に住民へのサービスに反映されていくもので、町立図書館の情報発信機能として特筆すべきだ。

また、ブックスタートから始まる子育て支援事業も健康福祉部局との連携により 10 年を迎え、今までにない年齢層の図書館利用を生み出している。

＜図書館サービスを支える職員集団＞

図書館は有機的に発展するものであるといわれるが、その根幹には単に資料の貸出しを行うだけではなく、図書館機能を十分生かしたサービス展開をしていく職員集団が形成されることが不可欠である。この 10 年を振り返ると、こうあればと思っていたことが少しずつ実現してきているのを感じる。これまでの経験、研修の積み重ねの結果、時代を捉え、情報をキャッチ

し、発信していくという職員集団が形成されてきていることを感じる。

＜住民の中に根づく図書館＞

熊取町育ちで、現在、司書課程の講座を受講している大学生の熊取町立図書館体験を一部紹介したい。「私が小学生のころ、週末に家族とよく近所の熊取町立図書館に出かけた。児童の本も非常に多く、紙芝居もたくさんあった。また、おはなし室もあり、よく読み聞かせにも行った。今思えば、とても恵まれた環境だったのだと気付く。（中略）この図書館は解放感に満ちていて、周りが樹であふれ、太陽の光をたくさん感じられる明るいつくりになっている。また館内は常に清潔感でいっぱいだ。私はあの空間が大好きだ。快適だし、何時間も過ごせる。司書の方も必要以上に関わらず、困った時はいつも親切。お気に入りの図書館だ。」

このように、開館から 18 年が経過し、図書館のある町で育った子どもたちはすでに社会人となっている。次世代を担う子どもたちの中に図書館のサービスが根付いていることがわかる。

＜今後への期待＞

図書館協議会では、図書館サービスは数字的に評価できるものではないという基本を捉えたうえで、外部評価を行ってきた。利用の拡大や障がいのある方へのサービス、学校図書館支援センターとしての役割など、一定の評価はできたが、評価基準の見直しも視野に入れた評価になったことも書き添えておきたい。熊取図書館の今後はこういった一般的な評価基準ではなく、予算削減の中で今ある図書館の機能や資料をどう生かしていくか新たな短期長期の基準を設定して評価を行うことも考える時期に来ている。その上で、住民の生活に密着した親しみのある図書館、行政サービスに役立つ図書館を目指すことを期待したい。

個別評価項目について

評価表１　住民参画による適切な図書館運営		
評価対象事業	自己評価	外部評価
（１）住民との協働によるサービスの推進	B	A（前年A）
（２）効率的・効果的な図書館運営	A	A（前年A）

【意見】

（１）住民との協働によるサービスの推進

・多様な協働のあり方があり、図書館は町の中で最も協働が進んでいるのではないか。その意味で評価はAに値する。

・町民文化祭への参加、雑誌オーナー制度、協議会委員の公募は大変よい。

・非常に多岐に渡る住民参画のボランティアや団体との連携をしながら、図書館運営に当たっている。

・十分な活動内容である。

・色々な面から図書館を支える住民グループやボランティアグループが増えてきている。この町の「図書館づくり」の原点でもあった「協働」が生かされている。

・熊取町の協働憲章ができたこともあり、図書館が行ってきた住民との協働の在り方を担当課に働きかけ、協働とは何か、どう協働するのかノウハウを提供する必要がある。

（２）効率的・効果的な図書館運営

・「効率的」ということについては、どのような基準で効率の評価をすればよいか、疑問である。しかし、効果的ということでは、Aと評価出来る。

・ブックトーク、新しい取り組みのビブリオバトルも司書の資質向上となっている。
また参加する利用者が司書に親しみを持つ機会にもなる。ビブリオバトルについては、如何に参加者を増やしていくかが課題であるが、色々な場で広報につとめて欲しい。

・正規職員の新規採用のない中でのサービス拡大は、ますます困難になってくることは必至である。効率的な図書館運営には、計画的に次世代の職員を育てて行くことが必要になる。

・サービスを拡大する一方、職員が増えない状況では何を優先すべきかが課題になるので、担当する分野の事しかわからないということがないように、職員間での情報の共有やコミュニケーションが重要になってくる。

評価表２　情報収集の場としての図書館機能の充実		
評価対象事業	自己評価	外部評価
（１）利用者の拡大	C	B（前年B）
（２）新鮮で魅力的な蔵書	A	A（前年B）
（３）的確な資料・情報の提供	B	A（前年B）

（１）　利用者の拡大

・利用者の拡大は図書館のみの責任では無く、利用者自らの価値観に左右されることが大きい。いろいろ工夫はいると思うが、自虐的にならないでも良い。

・町内の利用者数は伸びているので評価したい。

・目標値が適切でない。指標の取り方を次の検討課題としてほしい。

・毎年同じ時期に来館者数の統計をとって表しても良いのではないか。貸出し以外の数字に表れない図書館の利用がある程度見えてくると思う。

・様々な図書館サービスを出前講座等の機会にＰＲを重ねてほしい。

・図書館で育った子どもたちに対して、図書館が社会に出ても役立つものであることを伝えていく手立てを考える必要がある。現にブックスタートでは文庫で育った次世代が子どもを連れて戻ってきていることを考えると、次の世代への拡大は可能であろう。

（２）新鮮で魅力的な蔵書

・図書費の減少は新たな資料の購入に制限がかかり、今ある資料で職員の努力や工夫だけでは魅力的な蔵書構成にはならない時期が来る。

・開館以来利用度の多い資料の傷みが激しく買い替えができていない資料が多くある。

・司書のおすすめ本、話題の本、新聞の書評の切り抜き掲載等、情報収集の場として時間をかけて工夫されている。

（３）的確な資料・情報の提供

・“資料の貸出”の目標値が高過ぎた嫌いがある。また他図書館との連携の減少は“当館資料で賄えた”という意味とも受け取れる。

・行政情報提供は、非常によく努力しており、Ａに値する。

・議員室にもこのサービスが出来ないか。

・町広報を使ってどんな情報提供ができるかのＰＲをすることや図書館利用者の「図書館がこんな風に役に立ちました」などの声を載せることもよい。

・町のホームページの中でも図書館のページは充実している方である。

評価表３　だれもが読書に親しめる環境づくりの推進		
評価対象事業	自己評価	外部評価
（１）ＹＡサービスの充実	Ｂ	Ｂ（前年Ｂ）
（２）シニアサービスの充実	Ａ	Ａ（前年Ｂ）
（３）障がいのある方へのサービスの充実	Ｂ	Ｂ（前年Ｂ）

（１）ＹＡサービスの充実

・中高生の生活時間等掘り下げて考える必要があり、難しいテーマではあるが、今後新しい取組みを検討すべきである。

・ＹＡの世代は、今は価値観が種々雑多である。その中において、集約することの困難性を感じる。

・学習の場所を作ることがＹＡサービスではないことを確認しておきたい。

・中学校の学校図書館司書からのニーズのフィードバックや、学校図書館の中に町立図書館の情報コーナーを作るなどの試みは実施されているが、図書館に中学生の居場所があることや様々なサービスのＰＲをさらにしていく必要がある。

（２）シニアサービスの充実

・21 年度から実施されている出前講座「らいぶらり庵」は図書館に親しみを持ってもらい、図書館サービスをＰＲする絶好の機会になっていると思う。大いに活用してほしい。

・出前講座の様子やそこでの要望を図書館にコーナーを作ってほかの利用者にも知らせることができるとよい。

・シニア世代を受け身としてではなく自己実現をするために、積極的に図書館が役立つことをＰＲしてはどうか。

（３）障がいのある方へのサービスの充実

・結果だけでなく働きかけやニーズの掘り起こしの工夫についても指標に反映したほうがよい。

・障がいを持っていることにより様々なトラブル（消費者トラブル・コミュニケーション不足による近隣でのトラブルなど）に巻き込まれている現状がある。当事者だけにではなく、障がいを理解するためのサービスを充実する設定が必要。

・朗読サービス（対面朗読室の存在も）、宅配サービスはまだまだ知られていないのではないか。引き続きＰＲすることで利用に繋げてほしい。一方で民生委員や区長会との連携を今後さらに深めることも必要。

・最近では、病院の待合室や電車の中などで、タブレット端末やスマートフォンで子どもに絵本を見せている保護者の方もいる。電子図書・絵本は双方向のやり取りができるものもあり、さわる絵本を触覚で楽しめるように、視覚、聴覚、触覚など五感で楽しめる電子書籍があれば、知的な障害や身体的な障害のある子どもたちも、より楽しめるように思う。また、音声読み上げ機能があれば、視覚障害のある方にとってはもちろん、文字を読むのに困難が伴うような状況にあっても利用しやすくなると思われる。電子書籍の導入の研究もそろそろ必要になってきている。

評価表４　子どもの読書活動の推進		
評価対象事業	自己評価	外部評価
（１）子どもと本をつなぐ大人の育成・支援	B	B（前年B）
（２）乳幼児期・幼児期における本に親しむ機会の拡大	A	A（前年A）
（３）学校図書館支援センターとしての機能の充実	B	A（前年A）
（４）障がいのある子どもの読書環境の整備	B	B（前年B）

【意見】

（１） 子どもと本をつなぐ大人の育成・支援

・新規活動者の増加は現状から困難。ボランティア団体等に参加を呼びかける工夫をしており、指標を再検討すべきである。

・子どもの問題は、子どもより親の教育と価値観が優先する。その親の価値観と図書館に対する理解を得るコミュニケーションを活発にすることが大切なように思われる。

・図書館の利用者に対し、活動団体のＰＲコーナーを作りどんなことをしているかの情報を提供し、関心を持ってもらう働きかけが必要である。

（２） 乳幼児期・幼児期における本に親しむ機会の拡大

・保育所、幼稚園に本を届ける「絵本こぐま便」や「えほんのひろば」などは、乳幼児が本に親しむ機会として良い取組みである。

・絵本リーダーの研修は、どの程度保育所（園）や幼稚園での取り組みに発展しているのか？「絵本こぐま便」では、本を届けるだけではなく、その機会を捉え保育士や先生方と子どもの利用状況や要望などをじかに聞く機会としてほしい。

・保育所（園）や幼稚園に、もっと本を子どもの身近に置くことを積極的に働きかけていく必要がある。

（３） 学校図書館支援センターとしての機能の充実

・年次計画として学校図書館資料の除籍支援等、地道な努力を積み重ねており、学校の信頼も得ている。

・学校図書館司書のスキルアップを学校教育課と連携しもっと進めてほしい。

・学級文庫への団体貸出しを実施してはどうか。現状では子どもの身近（学級の中）に本が少ない。小学生版「こぐま便」を作り、各学校にＰＲしてはどうか。

（４） 障がいのある子どもの読書環境の整備

・布絵本を届け、活用方法についての研修会を開くなどきめ細かいサービスで行き届いている。

・環境整備など努力している。

・支援学級の担当の先生方との交流を進め、支援学級文庫の充実をしてはどうか。

評価表５　多様な学習機会の創出		
評価対象事業	自己評価	外部評価
（１）文化講演会等の開催	A	A（前年A）
（２）住民団体等の活動の支援	B	B（前年B）

【意見】

（１）文化講演会等の開催

・もっと図書館主催をアピールする必要がある。

・22 年度からは落ちているが、20 年度 21 年度と比べてみて評価できる。

・団体との協働で様々な講演会を行なっている。 その中で、講演内容の関連本の、司書によるブックトークという工夫もあり評判が良かった。

・予算が伴うものに関しては減っていくのは仕方がないが、利用者や住民の中にある文化的財産の掘り起こしをして、公開できるものは積極的に図書館を活用して発表してもらうことも考えられる（絵画・研究・趣味の個展の開催）。

・テーマ展示（だんじり・さくら・野鳥）の説明を兼ねた文化発表会もよいのではないか。

（２）住民団体等の活動の支援

・厳しい目標値がある為仕方がなかった。

・町内で活動する住民団体の会報や資料を提供することで町の情報交換の場となるが、各種団体への広報も必要。

・活動する団体が何を図書館に期待しているのかを知る必要がある。団体向けのアンケートなど取り、ニーズを把握してもよい。

・図書館を使って定期的に団体紹介を行っていくことで、新しい利用者の掘り起こしにつながる。